214 脳幹部梗塞急性期 4 症例の Tc-99m HMPAO 脳血流 SPECT の検討

矢野隆郎（潤和会記念病院内科）、大西隆（同放科）、長町茂樹、陣之内正史、渡辺克司（宮医大放科）

我々は、発症6時間以内のCT上低吸収域が出現していない脳幹部梗塞 4 症例を検討した。1)Basilar top 及び 2)Midbasilar embolism の症例では、椎骨脳底動脈領域全体、3)両側椎骨動脈閉塞症例では、比較的限局した両側鳥距溝領域、小脳皮質、中脳、橋、4)脳底動脈穿通枝梗塞では橋に限局した集積低下を認めた。いずれも Lassen の補正は施行できなかったが集積低下部の基底核に対する集積比は 0.55～0.74 であった。症例 1)のみ血栓溶解施行し一部半盲残したものの独歩退院できた。Tc-99m HMPAO 脳血流 SPECT は脳幹部梗塞急性期の虚血の範囲及び程度を評価でき、血栓溶解療法の適応決定上有用と判断された。

215 境界域脳梗塞の病態に関する検討 －split dose I-123 IMP SPECT法を用いて－

森脇 博、奥 直彦、石田麻里子、植原敏勇（阪大放射線部）、橋川一雄、清家裕次郎、寺川晴彦、松本昌泰（同一内）、渡邊嘉之、西村恒彦（同トレーサ）

境界域脳梗塞(WI)の成因を検討するため閉塞性脳主幹動脈病変例(狭窄度>70%)連続96例を対象に、split dose I-123 IMP SPECT法を用いて、安静時脳血流とDiamox負荷による脳循環予備能を定量測定した。主幹動脈に病変を有さない10例(NS群)を対照とした。WIは28例に認め、深部型（または深部＋表層型）が23例(D群)、表層型が5例(C群)であった。発症様式はD群は緩徐発症型が、C群は突発完成型が多くみられた。安静時脳血流は、D群はNS群より有意に低く、予備能はD群はC,NS群に比し有意に低く、C群とNS群には差がなかった。D群には血行力学的機序のC群にはembolicな機序の関与が強いと考えられた。

216 脳血管障害患者の機能予後推定に対する脳血流シンチグラフィの有用性の検討

玉本文彦、富吉秀樹、田中慈雄（都立大塚放）伊佐地隆（都立大塚リハ）、住 幸治、片山 仁（順大放）

脳血管障害患者の長期機能予後に対する脳血流シンチグラフィの有用性について検討した。
66例の脳血管障害患者について当院リハビリテーション（リハ）科入院時とリハ後にADL(Activity of dayly living）の評価をBarthel Index で評価するとともに、リハ科入院直後に99mTc-HMPAO を用いて脳血流シンチグラフィを施行した。入院直後（リハ前）の全脳mCBF値はリハ後のBarthel Index に相関する傾向が認められ、特に右大脳半球のmCBFとの相関が認められた。リハ前の前脳mCBFの測定で、その長期機能予後が推定できる可能性が示唆された。また機能予後には、特に右大脳半球の血流が重要である可能性が示唆された。

217 SPECTにおけるTGAの評価

有坂 英史(大川原脳神経外科病院放射線科)
大川原修二(同脳神経外科)

TGA（一過性全健忘）症例の場合，海馬近傍長軸断層のイメージを提供してきたが，症例を重ねるうちに典型的な血流低下の場合が少なく，評価が難しくなってきた．そこで当院では新しい評価方法を考えた．長軸断層および冠状断層にROIを設定して左右のカウント値を出すことで，正常者とTGA患者の間に歴然としたROI値の差が現われた．この方法は，カラーレインボー表示としてのイメージだけではわからない，血流低下の確認として有効であると思われる．

218 Leukoaraiosis(LAS)症例のthree dimension ECD SPECT

福田忠治，高草木宏之，蓮江正道（東医大八王子医療センター脳神経外科），山崎 章，伊東洋子（同核医学），大野晋吾，伊東 洋（東医大脳神経外科）

LAS を伴った症例のECD SPECT を行い，対照例と比較した． CT scan にてLAS を認めた３例のthree dimension (3-D) ECD SPECTを行い，脳室拡大を伴いperiventricular lucencyを認めない停止性水頭症２例を対照例として比較した． LAS を示した３例では全例皮質下のECD uptakeが障害されていた．停止性水頭症ではECD uptakeの障害は見られなかった．通常のECD SPECT transverse sectionではLAS と脳室拡大を鑑別できなかった． 3-D ECD SPECT によりLAS を伴う症例に白質の瀰慢性の血流障害が存在することが示唆された．

219 アルツハイマー型痴呆患者の記憶障害への脳血流ＳＰＥＣＴの診断学的適用について

高山 豊 （国立精神・神経センター武蔵病院）
岩崎尚彌 （獨協医科大学越谷病院放射線部）

記憶障害のみを主訴とする痴呆疑いの患者の３１例について HM-PAO を用いた脳血流ＳＰＥＣＴ検査を実施して障害の責任病巣の探索と疾患の診断への適用を検討した。この群の神経心理学的特徴は言語性記憶課題の遅延再生成績の低下に最も顕著に現れる記銘力障害であり、それ以外の見当識，認知，空間構成，言語等の高次脳機能の障害は顕著ではなかった。この群の脳血流検査の結果ではアルツハイマー病患者に典型的に現れる頭頂葉－側頭葉における著しい血流低下やその他の大脳皮質領域の血流低下と判断されるものは目立たず、海馬を中心とした局所脳血流の低下のみが認められたので、ＳＰＥＣＴ検査は疾患の早期症状の診断に有用と考えられる。

Presented by Medical*Online